

## コミュニケーションは、「相互輔生」でありたい

先日、ネットで知り合った人たちが、集団自殺の報道があった。事件の詳細は解らないが、この報道に接して、改めてこれからのネット社会におけるコミュニケーションとは何かを考えさせられた。

コミュニケーションとは「相互輔生（梅津八三）」で、「相互輔死」ではないはず。

どう生きるかを互いに輔け合いながら、自らに問い続ける作業こそが、「相互輔生」であり、コミュニケーションと思う。それ故、共に死を輔け合うことを、コミュニケーションとは云わないはず。

自殺を思う個々の人の心情は、他人の理解・推測を越えたたいへんな苦悩であろう。私は、「自殺は、人としての最後の自らの選択肢の一つ」と思っているので、個々の方の自殺に鞭打つ気は、毛頭ない。

ただ、今回の事件は、「ネットで情報を共有し合って、互いの死を援助し合った」という点が、コミュニケーション論をライフワークとする我が身にはどうしても引っかかる。

つまり、まず自らの「死にたい」という意志を発信し合っているのであるから、正にコミュニケーションしようとしているということであろう。

単に情報（死にたい）を共有するだけでなく、なぜ「やりとり」まで、深めてくれなかったのかということである。「貴方はどうして死にたいの？ 貴女はどうして？ 私はこうなの。」というもう一歩踏み込んだ「やりとり」があれば、ひょっとすれば、自らを客観視するチャンスがあったかも…。そうしたやりとりはあったかもしれないが、死者に確かめる訳にもいかない。

このネットでのように情報過多の時代だけに、コミュニケーションとは、情報共有だけではなく、「相互輔生」であり、心情の「やりとり」のプロセス（螺旋状深まり）であることを、日頃から意識したいものである。

ネットでのように、情報を共有することが、コミュニケーションでないことをこの報道から改めて気づかされた。

（2004年10月16日 記）